

*****目次*****

- P1 今号の TOPICS 肥塚 眞
P2 副代表のメッセージ
八木橋佐和子
P3 仲間たちの近況報告 (1)
1班 藤田憲治
2班 大森美子
P4 仲間たちの近況報告 (2)
3班 和田啓志
4班 田村光國
P5 仲間たちの近況報告 (3)
5班 岡田洋子
6班 中山勝一
P6 私の玉手箱 中村 章
P7 樹形ウォッチング遊上眞一
P8 リレー随筆 宮澤富美雄
俳句・川柳・絵画サロン
岩城正大、山邊明美、
谷坂修二、藤田憲治

◇自然と文化だより◇

24号に投稿頂いた皆様、有難うございました。

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし 在原業平。本当に今か今かと心騒ぐこの頃ですが、いっそ桜が無ければ穏やかな春を過ごせるのにな～、と業平流にこの時期を愛でましょうか。同時に梅は咲いたか桜はまだか、と言われて桃の花がすっ飛ばされていますが桃は実を食べるだけのものなんでしょうか？少し不公平。今号より野村さんに担当願います。長年に亘り有難うございました。 N.Take



今号の TOPICS ～2年間を振り返って～

代表 肥塚 眞

前任の武井さんからバトンを引き継ぎ、伝統のある自然と文化科の代表に選出されて、瞬く間に2年間が経ちました。

この間、科員の皆様のご協力により、お陰様で、事故もなく怪我人も出さずにさまざまな活動を実施出来たこと、出席率も平均で70%前後と高率であったことなど、心から感謝申し上げます。

科員数は来年度103名と予想しており、暫くの間は同程度をキープするものと推測され、調査・研究部では最大人数を擁します。且つ、多士済々が揃う最強の研究科であると自負しております。

当科が直面している最大の課題は100人体制への対応です。本年度から、科員が100人を超えたので、これまでの4班から6班体制に変更し、フィールド活動については、班別・グループ別・場所別・コース別・体力分けなどの行動を実施してまいりました。

しかしながら、科員数と班数の増大に伴う課題も出てきました。顔と名前が一致しない、科としての一体感が薄くなった、同期でも会えない活動日がある、予算管理が複雑になった等々。

多くの科員を抱えて、如何にして皆様のご要望に添えて活動が出来るのか、よりスムーズに運営するにはどうしたら良いのか、科員の一体感をどのようにして維持していくのか、更に科員の高齢化も進み体力に合った対応をどうするかなど課題も見られるようになりました。

次に、公益的な外部に向けた活動の拡大や、ボランティア活動への積極的な取り組みを如何にして進めていくのかです。社会貢献活動として、各種イベントへの積極的な参加や、活動領域の開拓・拡大を進めることが求められております。さまざまなノウハウの習得と蓄積、各種材料の確保なども重要です。

また、予算管理体制の強化も図らなければなりません。各委員会が責任を持って、予算を立て費消状況を把握し、運営委員会が全体の調整と管理を一層強化することや、支払いルールをより明確化するなどが必要でしょう。

更に、調査研究活動を充実させることも重要です。ややもすると「遊ぶ」・「学ぶ」に偏りがちになりますが、当科は調査研究部に所属しており、「調査する」・「研究する」ことを強化することも重要だと思います。

これらの課題に対して、全科員が自由闊達に議論を交わし、知恵を出し合い創意工夫し、解決して行かなければなりません。常に進化する明るい希望の持てる科を目指そうではありませんか。

当科の活動はすべてが「自作・自演」であり、人任せでは成り立ちません。一人一人が目標を持ち、積極的に参画されることを大いに期待してやみません。

立ち止って、ふり返って

副代表 八木橋 佐知子

瑠璃色のオオイヌノフグリ、真っ白いハコベ、そして薄桃色のヒメオドリコソウが咲き始めた。足元の小さな自然はちゃんと自分の季節を覚えていて、身の丈の花を咲かせる。トサミズキの花芽がぷっくり膨らんで、芽鱗がはじけている。アジサイは透き通るような緑色の小さな葉を展開し始めた。私は何回この季節を迎えたのだろうか。かくさず言うが70回も・・・だ。なのに、まるで初めて出会う時のようにワクワクし、はしゃいでいるのはなぜだ。

この3月で、2年間務めた副代表の任を解かれる。女性を活用する、という風が政界にも企業にも、また小さな任意団体にも定着し始めているこの頃であるが、私が職場にいた頃はまだまだ男社会だった。男女雇用機会均等法なんてあるにはあったが、浸透するにはまだ時間のかかる時代。そんな中ひとりの実力派女性課長が前を走っていた。私はその人の背中を夢中で追いかけていたことを思い出す。実力も体力もないため疲れ果て、ついに体調を崩し数か月間、会社を休むことになるのだが・・・しかしこれが自然大学との出会いにつながっていくのだから、人生って面白い。

計画比 効率 工数 カタクリの花を見たと突然おもう

こつ然と消えても誰も気づかない雑踏の中のわれの存在

一般論でもの言う人と聞く我の間取り持つ机上のダリア

その頃、詠んだ歌だ。

事情はちょっと違うが、自然と文化科では山本祥子さんが初めて女性副代表を務められた。続くべき女性が都合で引き受けにくくなったということで、急きょ、私が中継ぎで了承いただき、お役目を担うことになった。2年間何とかやってこられたのは、みなさんの寛容なご協力に他ならないと、感謝の気持ちでいっぱいだ。

特に万博ネイチャーラリーを担当させていただいた時の事。科としてネイチャーラリーに出展するのは初めてだった。過去に八幡屋公園などでオナモミダーツと顕微鏡を使った観察という実績は

あったようだが、私は関係していなかった。なので、私も手探り、実行委員になっていただいた新入科員も手探りのスタートだった。けれどミーティングを重ねるうち、斬新なアイデアが飛び出し、材料集め、運搬、下準備・・・とみなさんの実行力には目を見張るばかりだった。

昆虫や鳥などの工作作品を提供いただいて、森を再現するすばらしい飾り付けができた。看板も面白い。私も欲しくなるようなマツボックリのクリスマスツリー、子供の目をくぎ付けにした妖怪ウォッチ。顕微鏡で観察する草の実などの素材集めなど工夫がこらされた。本当にすばらしい仲間に出会えた。すばらしいパワーを知った。すごい結束力を見た。

また、この度、副代表を素敵な女性に引き継ぐことができたことも中継ぎの私にとっては何よりうれしい。

見渡せばわが科は、最近ピチピチ男子と腕きき女子であふれている。例会も飲み会も、集合場所の駅前も賑やかになった。時代は急速に確実に動いている。

ひとりふたりさんにんよにん またひとりヒトリシズカの咲く道をいく

種一つ抱いて綿毛はとんでいくノゲシが風にふかれるたびに

この部屋の空気サクサクかきまぜる語尾さわやかな君の発言

自然と文化科の活動を「動」とし、歌を詠むことを「静」として平衡を保ち、いま私はゆっくりゆっくり歩いていきたいと思っている。とはいえ、座ればすぐ眠くなるし、足も少々もつれだしたようだが・・・。

改めて、心より在任中のお礼を申し上げます。



都会の森

1 班 藤田 憲治

私は、大阪府中央区本町と淀屋橋の間に、事務所としてマンションの 7 階の部屋を借りています。ベランダは真東に向き、横 4 メートル強、幅 1 メートル強です。其処に 15～16 個のプランターや植木鉢に 40 種類程の木が生えています。自分で植えたものや鳥が種を運んできたものです。グッケイジュ・トベラ・テイカカツラ・クワ・ナツメ・モミジ・クヌギ等々ですが、殆どが落葉樹です。

夏は早朝から日光が差し込むので日除けにゴーヤ・キュウリ・フライングソーサーを植えています。これだけで 2～3 度は涼しくなります。

楽しいのは紅葉が始まった頃から見られる鳥たちです。10 年くらい前から比べると、雀の数がめっきり減りましたが・・・。10 月下旬からナツメやモミジの小枝にミカンを二つに切って何個か刺しておく、まずメジロが来ます。多い時には 10 羽ほどがベランダの中を飛び回ります。幸せな気分を味わいます。其処へたまに雀、ヒヨドリ、渡り鳥のツグミが闖入します。今年はメジロが朝早くから日の入り近くまで居座っています。必ずと言っていい程ペアで訪問します。あるペアがミカンを食べていると、突然他のペアが割り込み追いかけ回します。その隙にどこかで待っていた第三のペアがミカンを食べます。縄張り争いです。

ショックだったのは 8 年ほど前に仕事中にベランダのガラス戸に何か衝突する音がしたので横を見ると、大型の鳥がメジロをくわえて飛び去るところでした。図鑑で調べてみると「チョウゲンボウ」で、淀川の鉄橋の下などに巣を作るようです。自然の生存競争の厳しさを目の当たりにしました。ガラス戸には、埃に汚れていたのか「長元坊」の姿が綺麗にプリントされていました。

メジロは熟したバナナやリンゴも食べます。ツグミはお米も食べます。

梅の花が咲き、啓蟄が過ぎて桃や桜の花が咲き出す頃にはメジロともお別れです。餌が豊富になり、5 月頃からは出産ラッシュです。その頃には私もゴーヤやキュウリの種を植えなければなりません。ただ、心配なのはマンションのベランダは共用部分なので、何時クレームが入るかも判らないということです。まあ、その時はその時のこととしようと思っています。

平成版 蟻の熊野詣

2 班 大森 美子

2004 年 7 月 7 日、「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として世界文化遺産に登録されたのが、熊野古道である。2014 年は 10 周年ということもあり、地元はもとより旅行社が大々的に売り出した。「世界遺産熊野古道ウォーキング」「語り部と行く熊野古道ウォーク」など。それらに釣られて昨年 3 月より月に一度参加している。

バスの発着場所はいろいろ有るが、ウォークは同じ場所であるため、3～4 台分の人数が歩き出すと正に「蟻の行列か？」と思わせる。



「伊勢へ七度」、「熊野へ三度」、「愛宕さまへは月参り」と言われ、自然崇拜の地である。907 年宇多法皇の御幸が最初で、1090 年の白河上皇の御幸から頻繁に行われるようになったそうである。

京の都より淀川を下り、天満～田邊経由であった熊野三山への信仰は、100 度に及ぶ上皇の熊野御幸として花開き、鎌倉時代以降は庶民にも広がり、信仰は「全国区」となった。

江戸時代に入ると、お伊勢参りと並び熊野詣は広く庶民が行うようになり、熊野付近の旅籠には 1 日で 800 人の宿泊が記録されたそう。

数ある古道の中で私は、伊勢路コースに参加した。お参りにも順序があるそうで、「お伊勢さん」（外宮→内宮）次に熊野参詣が正式とか？？？

又、昨年は出雲大社・伊勢神宮の遷宮祭の翌年で「おかげまいり」の年に当たると聞き、二社ともお参りしたが、流石にお参りの作法を心得ておられる方が多いのにビックリした。

さほど信仰心があるわけでもないが、日本人に生まれてよかったと実感し、ガイドさんの四方山話は興味深く、この受け売り話を「へ～」「そ～」と聞いてくれた同期の仲間感謝。

熊野まであと少しです。

★出雲大社の参拝方法は「二礼四拍手一礼」。

元素記号Hの話

3 班 和田 啓志

昨年 12 月に岐阜県土岐市の“核融合科学研究所”へ行った。今の原子力発電所は核分裂による原子力発電で、放射能をまき散らす。その中でもプルトニウムは半減期約 2 万年で、青森・下北半島の先端にある大間にプルサーマル原発を作っている。ここから出る放射能が蓄積されると、どうなるだろう、ゾッとする。核融合発電は放射能をあまり出さず、原料も海水の中にある重水を使うので殆んど無限、良いこと尽くめ。問題は 25 年～30 年で発電を実証する見通し(研究所HPより)との事である。少しでも早く実現することを願う。その時には今の原発は無用の長物と化し、放射能汚染だけが残る。

次に、ガソリンを使う自動車…。トヨタが昨年 12 月 15 日に FCV 燃料電池自動車を発売した。燃料は水素と酸素だけ。排気ガスは水蒸気（水）、環境の優等生。水素は製鉄や化学工場から大量に発生しておりこれを利用したり、水の電解など、原料には事欠かない。全部この水素自動車になると石油が要らなくなるのでは。トヨタは FCV 燃料電池自動車を世界で早く普及させるために、持っている特許を無償公開することにした。ホンダは今年、日産は来年発売するとのこと。水素ステーションも、全国に目下鋭意増設中。

3 番目が水素健康法。インターネットで調べると、アルカリイオン整水器、水素生成器、水素スティック、水素吸蔵サンゴ、水素サプリ…など、水素関係の食品が花盛り。老化現象、ガン、痴呆症…などに如何とのこと。これを活用しない手はない。医者知らずに、健康で過ごすことが一番。「自然と文化」の目的に合致している。

これが“元素記号Hの話”で、水素の時代に入った。宇宙は「ビッグバン」で始まり、最初に水素が出来た。太陽は水素の塊で、水素が融合してヘリウムになる、その過程の熱で我々が生かされており、水素さまさまである。

小生この 2 月 14 日で“傘寿”になった。まだまだ元気であるが、これを機に、引退することにした。年賀状なども遠慮することにしているので、お構いなく。皆さんお元気で、“水素”だよ。

「大雨特別警報」と「避難指示」が出た！

4 班 田村 光圀

平成 25 年 9 月 16 日(月・祭)、台風 18 号による大雨のため桂川、宇治川が増水し水害の危険が高まった。(京都嵐山渡月橋付近の浸水時)

私の家は、京都市伏見区淀(淀城・京都競馬場所在)で、江戸時代まで木津川を加えた三川合流地(現八幡市背割り付近)であり過去には水害による被害が多発している。当日心配で早朝よりテレビを見てみると、5 時過ぎに「これまでに経験のないような大雨」として全国で初めての「大雨特別警報」が発令された。6 時過ぎには伏見区に「避難勧告」が発令されたので、町役員から直ぐに避難準備するようにとの連絡があった。8 時には「避難指示」が発令され、外では、消防署と警察が車で避難場所に指定されている「小学校」や「競馬場」へ即時避難するようマイクで喧伝されていた。

さて私はどうするか判断しかねていた。テレビは、特に桂川が増水状態を報じている。家の近くの宇治川の状態が気になるがこのような状況の中、堤防へ確認に行くことは危険極まりなくて行けない。ただその時点で雨は余り強くはないこと、我家が淀の中では比較的高い位置にあり、避難場所の小学校や競馬場の 2 階と同じ高さにあることでもあり、家の 2 階に留まり様子を観ることとし、ボランティア仲間等と電話で状況を確認しあった。桂川に近い所の方は避難し、他は避難していない人が多いことが分かった。後日の反省・検討会で、避難しなかった人の意見は災害時の避難経路で指定された避難場所へ行くと、居住地より低い箇所を通って行くので危険がある由。淀もそれなりに広く、各町で様子が違い、「避難指示」が出たからとはいえ全員一律にはいかず、それぞれの地域で対応を考えていく必要もある。また、要支援者を車いすで小学校へ避難させた仲間の話ではその人一人を援助することで精いっぱいであり、避難先の小学校に着いてからも、2 階へ上げるのが大変で多くの人の援助を依頼せねばならなかった様子。何人もの要支援者を把握していても、緊迫度にもよるが、一人では近くの要支援者 1 人位しか援助出来ないことが分かった。

災害時は、先ず自助、次に共助であり、公助は即時には間に合わない。近隣の共助が特に大切である。今回の貴重な体験と反省事項を今後、万一の時に活かせられたらと思っている。

石窯造り

5班 岡田 洋子

昨年知人宅に寄せていただいた折、庭に石窯があるのを見て私も石窯を造りたくなりました。

「石窯を造るならお手伝いしますよ」と言われその気になり、早速庭のどの場所がいいか見に来ていただきました。場所が決まれば耐火煉瓦を注文し、次は基礎である。基礎は水平や垂直に保ち鉄筋も入れないといけないので工事は業者をお願いしました。

3月29日：準備は整い、いよいよ石窯造りです。当日本科の同級生が手伝いに来てくれました。みんなセメントを混ぜた事もなく、コテも触った事もないので扱いもままならず、さらにグラインダーでレンガをカットするなど、みんな初めてのことばかりで悪戦苦闘、指導を受けながら徐々に上手くなり、息も合い中段の棚まで造れました。

4月26日：今日は難しいアーチ造りですが、どの様にして載せて行くのか心配していましたが、コンパネでアーチ型を作って来て下さり、そこに書いた線に位置と角度を合わせながらレンガを載せて行くので思いのほか上手く行きました。

5月1日：耐火煉瓦は水に弱いとの事、屋根を作るか周りを普通のレンガで覆うか、どちらかと言われレンガで覆う事にしました。同時にコンパネを外せば最初の火入れが出来、煙の流れを見るのとピザも焼けるとのこと、煙の流れも上々、ピザも上手く焼け美味しかったです。

5月5日：残り全部をレンガで覆う。5月24日：いよいよ最後煙突の仕上げです。型枠を作り、茶筒を入れ周りをレンガで積んでいく。6月7日：茶筒を抜く。8月31日：全面にタイルを張り、陶芸で作ったフクロウを飾り完成です。

9月21日：完成パーティです、色々とお世話になった方々や仲間と賑やかに、ピザを焼き、鳥、肉も美味しく焼きました。これから石窯で燻製作りやパン作りを勉強して楽しみたいと思っています。



久しぶりのシンガポール

6班 中山 勝一

この2月に地球環境自然学講座の海外自然観察会で約20年振りにシンガポールを訪れた。ガーデン・シティとして花が多く、清潔な印象は以前のままだが、少し変わってきている様に思う。最初に訪れた30年前はサマセット・モームが愛した古きイギリス・コロニアル風の面影が残っており、ご婦人方はヨーロッパの有名ブティックでショッピングに熱中していた。今回は



時代の流れか、総合リゾートのアミューズメント・シティの側面が強くなっているのを実感した。バイエリアの再開発で人工的な仕掛けが観光客を喜ばしている。巨大な高層ホテル、スーパーツリーと呼ぶ大樹を模した巨大なモニュメント、また



大きなガラスドームの中に高山を模したクラウド・フォレストや園芸植物の集まりフラワードームなどと「緑」とは言いながら、自然のあるがままの姿からは随分かけ離れている。セントーサ島や、ナイトサファリも観光が面に出ている。シンガポールには約150年の伝統を誇る広大な植物園があり、熱帯雨林の大きな板根を持つヘリテージツリーや熱帯植物が南国の気候のなかで豊かに育っている。園内にあるシンガポールの国花であるランを集めた国立ラン園も見事である。其処にはジョギングやピクニックを楽しむ市民の姿があり、植物園は日常風景になっている。また大理石の採掘場跡のウビン島を再開発の手は入れず、マングローブの林として保存している。

観光の集客の為に新しい植物園と市民憩いの場としての植物園を区分けしているという事であろうか。国としてのコンセプトが明確なシンガポールらしいといえそうなのだが。家族連れで色々楽しめる島である。物価が高いのが玉に瑕である。



アナログオーディオを楽しむ

4班 中村 章

私がオーディオ趣味にのめり込んだのは 1970 年頃である。当時の音源は LP レコード、オープンテープ、カセットデッキ、FM 放送などいわゆるアナログ(今のデジタルに対し)オーディオであった。今は CD (SACD) でも音楽は聴くが、どうしても音の硬さ不自然さは拭えず CD 装置とアンプの間に特殊なトランスを挿入し、中音を膨らませて LP レコードに近い音で音楽を聴いている。好みのジャンルはクラシックである。

しかし、私はデジタルを否定してはいない。デジタルはオーディオの一部の技術であり、音の保管再生方法の事だからである。デジタルの技術や方法もアナログの手法によって生み出されており、歴史的な音響の大半はアナログによる保管方法の時代に確立されて今や一体のものである。

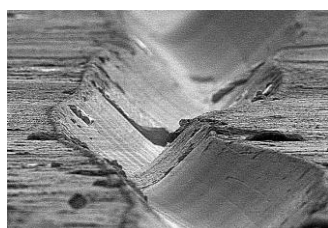
オーディオ趣味は良い条件のもとで音楽が聴け、深く楽しむ事が出来るかに尽きると思う。

今もアナログにこだわり続けて音楽を鑑賞している。

以下私の再生装置の一端を紹介したい。

★LP レコード

この写真は LP レコードの溝の拡大写真である。

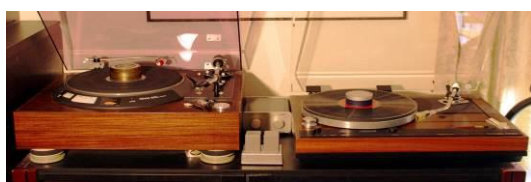


溝巾は約 0.06mm、トレースする針先は R0.03mm である。この微細機構の中で

振動、発電、変調、復調処理を繰り返し実際に、耳に聞こえる音としてスピーカーシステムから聞こえるのである。

★レコードプレイヤー

フォノモーター、ターンテーブル、トーンアームカートリッジ、キャビネットなどから成り、何れも入り口の音造りに大きく関わり、高重量、高密度で共振しにくい装置が良いとされる。針先(カートリッジ)は MC、MM タイプがあり、振動面では MC 型が優位である。LP レコードは千枚程あるが、音楽により数個を使い分けて聞いている。

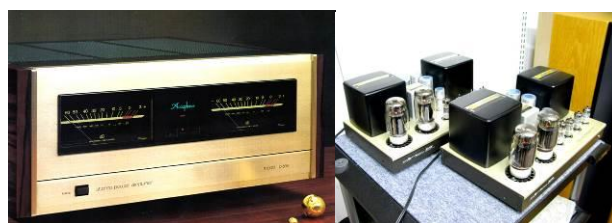


右 ダイレクトドライブ (AC) ロングアーム付
左 ベルトドライブ ロングアーム付き

★アンプ

昇圧、イコライザー、プリ、パワーの各種類がある。各個別の機器と一体型(総合アンプ)がある。パーアンプは増幅素子として真空管とトランジスターがあり、トランジスターが主流であるが、真空管も根強い人気がある。周波数特性の数値はトランジスターが勝るが、真空管はアウトプットトランスがフィルターとして働き、可聴帯域以外のノイズを遮断する。また、アウトプットトランス自体の「響き」も再生音に付加され、響きが多く柔らかく暖かい音を生み出すのが特徴である。

私のパワーアンプは古くからこだわって使っている真空管アンプ(モノラル型左右各 50W)とトランジスターアンプとして左右各 250W の 2 つを使っている。双方出力数値に大きい差があるが、聴力的に同じ程度のパワーに感じる。



左 トランジスター素子のパワーアンプ

右 真空管素子パワーアンプ(モノラル 2 台構成)

★スピーカーシステム

音の舞台の花形として出力を担うのがスピーカーシステムである。スピーカー単体では超高音、高音、中音、低音、超低音と様々あり、それらを組み合わせた 2、3、4 ウェイなどが一般的である。私はホールの環境を再現しすべての音が一箇所から聞こえる同軸 2 ウェイバスレフ方式のシステムが好みである。



左はスピーカーシステム(ボックス)をバラした状態
単体のスピーカーに見えるが、スピーカーの奥(コーン紙の中)に高音用のホーン型スピーカーを内蔵している。

★おわりに

オーディオ趣味は原音を求めるのではなく、自分なりの音に仕上げてゆく音づくりで音楽を楽しむことにあると思う。デジタル写真よりも絵画を楽しむように。今後とも楽しんで行きたい。

自然の中で生きている樹木を観察すると、それぞれの環境に適応した樹形となっていて、
その逞しい生命力に 感動させられます。

そして それを巧みに利用してきた 人々の知恵と、文化にも注目してみましょう。

遊上 眞一

モンキーポッド



木の内部に入ると、意外にも
葉がほとんどなくて、スケスケ。
枝や葉が多いと、重くなって
枝が広がれませんか。

「この木 何の木 気になる木」のCMでお馴染みの樹。ハワイ モアナルアガーデンには
枝張り 40mの巨木が 何本もありました。支柱はなく どっしりと立っていました。



モンキーポッドは マメ科の常緑高木。
葉は羽状複葉で 肉厚。
豆果も 肉厚。猿の好物が名前の由来とか。



幹周り 7mの重量感溢れる幹。

ユズ

宮澤 富美雄

昨年11月中旬、ユズの収穫中に義弟がケガをした。5mほどの高さから落下し、鎖骨と3本の肋骨を折るという大ケガで、即入院である。収穫は11月中にほぼ終わらせねばならず、しかし、作業できるのは80才を越えた義父母と、手伝いに行っていた家人だけ。そこで、急きょ私が手伝いに行くことになった。

果実を収穫するホンユズは樹高3m前後で、摘果には高切りバサミを使う。厄介なのはその鋭いトゲで、これで果皮を傷つけてしまうと商品価値が落ちる。また、崖上や傾斜地など足場の悪いところで栽培しているので、常に足元に注意していなければならない。ユズに気を使い、足場に気を使い、ハサミで腕が疲れ、この作業はけっこうつらい。

ユズの商品価値が最も高いものは皮がきれいなもの。これは料亭などで柚子釜（料理を盛りつけする器）などとして使われるらしい。次に皮がきれいなものは漬物や香辛料などに。そして、皮に汚れやキズのあるものは最も安くなり、酢玉といって酢用になる。つまり、「ユズは見た目が第一」なのである。またくユズの大馬鹿18年＞などと言われ、成長の遅いことで知られるが、栽培の場合は、カラタチに接ぎ木したものを使うので数年で収穫できるらしい。

ユズは高知・徳島・愛媛の3県で全出荷量の8割を占めており、高知県馬路村は特に有名であるが、家人の実家は同県香美市というところ。この地区には現在約200軒のユズ農家があるが、その就業平均年齢は70才を越えているとのこと。出荷のためにトラックに乗ってくる老夫婦を見ると、過疎と高齢化という農村の問題を痛切に感じる。と同時に、過疎地だった馬路村を一大ブランドにした知恵と努力に感服する。

ちなみに、ユズは飛鳥・奈良時代にはすでに栽培されていたという記録があり、また、珍味【ゆべし】は源平時代に生まれたもので、保存食・携行食として使われていたとされている。

自然と文化だより
皆様のご協力により24号が発行出来ました。次号もお楽しみに！（広報委員会）

水彩画

1班 岩城 正大



幻の椿「玉の浦」

2班 山邊 明美



S22年五島列島の福江島の炭焼きを生業にしていた人が、偶然見つけたヤブツバキ
48年の長崎椿展に出品され椿愛好家の知るところとなり、その後枝を採取され 裸同然になった原木は枯死してしまいました。
詳しくはネット等でご覧下さい。

（27.03.02 都市緑化植物園撮影）

冬の俳句

谷坂 修二

雪まとい少しは目立つ三田富士
カメラマン梅一輪に目白押し
雪軽く雀が集う日当道
大設備原子が踊る春を待つ
薪を積み今に火を噴く古代窯

藤田 憲治

「あるブロガーの詩」
君が無駄に生きた今日は
昨日死んだ誰かが
死ぬほど生きたかった
明日なんだよ